

# ラボの世界 THE WORLD OF LABO



新しい季節に  
つぎのステージへ



07



02



03



06



10

## 南半球から来た仲間と

白銀に包まれた12月、オーストラリアから仲間がやってきた。南半球に位置を占めウルルで名高いかの国に、雪が降るのは8月。南極に近い大陸南部にはスキー場が点在し、観光客も訪れる。12月は夏になり、サンタクロースは6ぴきの白いカンガルーにそりを引かせてやってくるという。

季節が正反対の国からきた友人の目に、日本で降りつもる雪はどう映るのだろう？

そして、そこに新しい仲間との出会いがあつたとしたら？

生活をともにし、同じものを見て笑う。語りあい、いっしょにあたたかい食べ物を食べてあたたまる。それだけでおたがいの距離を縮め、赤道を隔てる生活の違いをも埋めてくれる。日本で出会ったいつもと違う「夏」はきっと、特別でたいせつな思い出になっているだろう。

◆雪に囲まれたキャンプ場で、みんなで協力して豚汁を作った

# ラボ国際交流センターは、 4月1日より公益財団法人として 新しく生まれかわります!

1973年に外務省認可の財団法人として発足した財団法人ラボ国際交流センターは、諸外国の青少年との相互ホームステイを中心とした国際友好親善、日本語普及活動、言語の調査研究活動などを長年にわたり推進してまいりました。

「新公益法人制度」の施行後、弊財団は、新公益法人への移行準備をすすめてきましたが、1月13日付で公益財団法人への移行認定が決まり、4月1日より「公益財団法人 ラボ国際交流センター」として生まれかわることになりました。これまで、ラボ国際交流センターを支えていただきましたみなさまのご協力とご支援に対し、あらためてお礼申しあげます。

今後は青少年の国際友好親善と国際理解教育の促進、地域の多文化共生のための日本語普及と支援活動、言語の調査・研究などを通じて、公益性ある活動をより積極的に行ない、社会に貢献してまいります。みなさまの一層のご支援と、ご協力をよろしくお願ひいたします。

## 東京言語研究所リポート

### 12月特別講座

#### 『悪霊』の衝撃 —ドストエフスキイにおける 悪の観念と〈ことば〉—



昨年12月3日①、亀山郁夫氏（東京外国语大学学長）による小説『悪霊』（ドストエフスキイ著）の公開講座が東京言語研究所で行なわれました。

亀山氏は2010年より3巻にわたるこのロシア語の長編小説を日本語に翻訳されました。この公開講座では、当時の時代背景から作品に対する熱い思いまで存分にお聞かせくださいました。

ドストエフスキイの『悪霊』は、1871年1月～1872年12月にかけて、雑誌『ロシア報知』に連載された作品です。これを書くきっかけとなったのは、実際にあった革命家による仲間のリンチ殺人事件でした。この事件からドストエフスキイは、高邁な理想を掲げている人間が、同じ理想を掲げる仲間を殺めることに疑問をもちました。それで革命を実現させるために

人びとの苦しみを苦しみと思わず、酷薄な意志で人びとを徹底的にやり込める、ひとりの主人公ニコライを中心とした物語を描いたのです。

亀山氏はこの『悪霊』を翻訳するにあたり「これまで注目されていた革命批判として描かれる『悪霊』ではなく、愛というものの不可能性をめぐるドラマとして描いた」と、40年来研究してきたこの作品への思いとともに述べられました。主人公ニコライは徹底的な悪の存在であり、彼に関わっていく女性は次つぎに破滅していく。人間の救いがたい「悪」をドストエフスキイは写しだしたのでした。

講師  
**亀山郁夫氏**  
東京外国语大学学長



#### アンケートより

▶亀山先生のお話を聞いて、文学作品を読むことの奥深さを再認識しました。作品に対する先生の深い愛情を感じます。(20代女性／会社員)

▶文学の世界のプロがどこにこだわっているのか、どこを楽しむべきなのかについて、ヒントを得ることができました。(30代男性／教員)

▶ドストエフスキイにはにがて意識があったのですが、今回受講したことで、もっと深く読みたいと感じました。英文学史における「悪」に対する考え方と、彼の考え方を比較しながら読むのもおもしろいだうと思いました。(20代女性／大学生)

# 自分の興味のあるものに出会い、挑戦して深める

2009年に世界無形遺産と認定され、いまや海外でも公演が行なわれる文楽。現在大阪を本拠地に活躍されている人形遣い・豊松清十郎氏にお会いしました。

—10代の頃はどのように過ごされていましたか？  
また、文楽の世界に入ったきっかけについて教えてください。

## 「まさに文楽にどっぷり浸かっていました」

文楽というのは日本三大伝統芸能(能・狂言、文楽、歌舞伎)のひとつで、そのなかの能・狂言や歌舞伎は世襲といって、その家系に生まれた人に代だい継がれていくのが通例ですが、文楽は基本的には世襲制ではありません。ですから私の師匠である吉田蓑助や、吉田文雀(ともに人間国宝)といった名の方方が入門された1940年代の頃は、遅くとも18歳までには弟子入りし、修行していくなければいけなかつたんですね。現在は、後継者が途絶えてしまわないよう40年前から文楽の養成制度ができ、専門学校のようななかたちで2年間勉強するということになっています。いまでは大学を卒業してから入ってくる人もいます。

私の場合は縁あって12歳でこの世界に入りました。その頃は東京にいましたので、学校に通いながら東京公演に顔をだし、春休み、夏休みには大阪公演に行ったりしていましたね。放課後、5時くらいから劇場にいって、舞台終演の9時くらいまではいろいろお手伝いをしていました。そして中学を卒業してから正式に入門したので、私の10代というのはまさに文楽にどっぷり浸かっていたといえるでしょうね。

私が文楽を最初に観たのは10歳のときだったでしょうか。やはりそのときに文楽に魅せられたのが、この世界に入るきっかけだったんだと思います。人間とおなじように、むしろ人間以上に人形が動くというのが魅力的でした。人形遣いが舞台に登場しない人形劇もたくさんありますが、文楽では人形遣い自身が舞台に登場します。そうするとはじめて観る人には人形遣いがじやまに感じるんです。それが慣れてくると、ふとしたとき人形遣いが消えて、人形だけが動いているように見えることがある。そのときに私は「何だこれは！」と衝撃を受けたんですね。

それから、10代のときは電車に乗るのが大

好きで、小学校の頃からひとりで切符を買ってあちこちへ行きました。文楽の世界に入ると巡業もありましたので、それまで乗ったことのなかつた電車にも乗れました。当時、「ディスカバー・ジャパン」というキャンペーンで駅にスタンプがおかれていたんです。それをいろんな駅で集めていたので、巡業に行くときには途中の駅で停車時間の間にさっと降りて押しにいく、というのをやっていましたね。それで電車に乗り遅れて怒られたこともありますたが(笑)。

巡業先では宿泊するわけですが、その頃は旅館が多く、若い弟子たちはだいたい大部屋に入っていました。それがいつも修学旅行のようで楽しくて。そして周りは年上やおとなばかりですから、話題も同級生と話す内容とはぜんぜん違います。文楽そのものの魅力だけでなく、そういうなかにいることも新鮮で楽しかったですね。

—文楽の人形はどのように操るのですか。

## 「3人の人形遣いで操ります」

文楽の人形は、足を遣う人(足遣い)、左手を遣う人(左遣い)と、主役として頭と右手を遣う人(主遣い)の、3人の人形遣いが操っています。入門するとまず足遣いからはじめますが、この役割はいちばん身体を動かすんですね。人間が移動するには足から動いていますから、そのぶん動作量も多く、体力がいります。また小道具の出し入れや、舞台幕の開け閉めも、足遣いの仕事です。といった作業を通して人形の動きや舞台全体の流れを学ぶことができるのです。

文楽人形の修行はほかの人形劇より時間がかかるといわれています。ひとりなら自分の思いのままに人形を動かせますが、文楽の人形は3人がかりで動かしますから、それぞれの息を合わせないといけない。たとえば「足遣い10年、左遣い15年」といわれるくらい、気の長い世界です。入門したらかならず足遣いからはじめます。ほかの芸能界だったら、器用で才能があれば1~2年で主役なんてこともあるかと思いますが、文楽はそれができない。そして足遣い、左遣いという役割は、頭布をかぶった黒衣のすがたですから、顔を隠した状態で20、30年とやってい

# 10代とともに



Toyomatsu Seijuro  
**豊松清十郎**

1958年9月26日、東京生まれ。洗練された粹を感じさせ、品のいいきれいな遣い方に定評のある人形浄瑠璃文楽座の人形遣い師。

1971年、四世豊松清十郎に入門。文楽協会研究生となる。初名は豊松清之助。

1984年、二世桐竹勘十郎に入門。

1986年、吉田蓑助に入門。豊松姓から吉田姓へとなる。

2008年9月、五世豊松清十郎を襲名。

近年のおもな受賞として、平成17年度因協会賞、第28回国立劇場文楽賞文楽優秀賞などがある。



取材は大阪市にある国立文楽劇場で行ないました。



かなければなりません。それが修行だといつたらつらいことだなと思うかもしれません、それは主遣いとして顔が出せるようになるまで、ただひたすらがまんしているというのではなく、人形の足を遣い、左手を遣うことで彼らも主役と同じように舞台で活躍することができるのです。

人形を遣う3人は漫才のトリオなどと違って、いつも同じメンバーではありません。なので足、左遣い(大阪弁で手伝い、てつたいといいます)のほうも、どの主遣いの師匠にでも合わせられるようにならなければいけません。動きにも約束事があって、足遣いは主遣いの身体の動きを感じとて、足を動かします。ですから主遣いは単に人形だけを動かしていればいいのではなくて、人形の右足を動かす場合なら、かならず自分の右足も出さないといけないです。そういう遣い方を学んでいくことで、その役の動きを理解できるようになります。そう考えるとやはりその頃から主遣いの修行ははじまっているといえるでしょう。

**—いまのお仕事のなかでの、やりがいや苦労されていることについて教えてください。**

### **「お客様に観ていただき、もち味を積極的に評価し伸ばす」**

やりがいは、やはりお客様に観ていただけること。ときに自分では思ってもみなかったかたちで喜んでもらえることがあります。自分でできていないなと思っていたことでも、お客様にはよかったですといつてもらったりするんです。みんなさんがテレビや映画を見るときもそうでしょうが、舞台やお芝居を観たとき、他人にとっては何でもないことでも、自分ががなにかを感じ、心を動かさ

れるようなものに出会うことがある。そのときの自分にとって、それがどんなにありがたかったかとか、そういう話を伝えてもらったとき、お客様に観てもらうこの仕事がもつ力のすばらしさを感じます。

私の場合は、中学生という10代の頃に自分の一生のことを決めてしまったわけですから、周りはすごいといってくれたんです。でも自分で好きはじめただけのことなので、とくに深く考えていなかったのだと思います。そういう点では他の人が進路や人生について悩むようなことが、自分はこの世界に入った後からでてきたのだといえますね。文楽を仕事として割り切ればいいのしようが、私にはそれができませんでした。どれだけ好きであっても、自分の失敗が文楽の価値を下げてしまう。自分はここにいていいのだろうか、そんなふうに悩んだ時期もありましたが、それでも40歳を過ぎた頃からようやく迷いもなくなっていました。

それから私の人形遣いは「上品」だといわれることもありますが、それはいいかえれば「人形が動いていない」ということ。若いうちはもっと動いていいんだとよくいわれます。遣い方を学ぶためにはまず動いてみるということですね。だから昔は「上品」だといわれてもうれしくなかったのですが、この歳になって、それがある意味自分のもち味になっているんじゃないかな、と思えるようになりました。いい意味で自分を積極的に評価して、伸ばしていくようにできればいいと思います。

**—いまもっとも興味があることはなんですか？**

### **「自分のスタイルを確立していくこと」**

幸い私は、途中で文楽がいやになるというこ

とはありませんでした。文楽の世界だけがとくに修行がつらいということはないですし(笑)。師弟関係はたいせつですが、それがとてもきびしい、ということもないです。ただ逆に、師匠に教えてもらうということもそんなに多くないので自分で勉強することが必要です。とりわけたいせつなのは舞台を観ること。「舞台に手本がある」といい、うまい人の舞台を観ることによって盗めるものがたくさんあります。教えてもらったことではなく、自分で試行錯誤したこと、自分がほんとうに必要としているものでないと、技は実際に身につかないんですね。そうやって悩んでいるときに観たもののなかに、ヒントがあったりするんです。そう考えると、本来的に人にいかを「教える」ということはできないんだと感じます。だから「師匠」といっても、教えてくれるのが師匠だというのではなく、舞台で輝いている人こそが師匠なんだといいたい。そういう人に出会うのがだいじだと感じます。大夫(=語り手)の竹本住大夫師匠は今年米寿を迎ますが、まだ現役。舞台を終えてからさらに弟子に稽古をつけてくれるという、ものすごいエネルギーをおもちです。そういう元気な師匠がいてくださることがありがたいですね。

私のいまの目標は、先代の豊松清十郎師匠をめざし、その理想の姿に近づいていくこと。師匠の「熱のある舞台をやれ」ということばが強く残っています。役柄の表現の巧みさ、クライマックスの盛りあげ方など、師匠の人形の遣い方からはそういう熱い思いが伝わってくるものでした。私はまだどうしても動きや技術にこだわってしまいます。師匠に近づきながら、それが師匠のマネというのではなく、自分自身のスタイルとして確立できればと願っています。



舞台上も案内いただいた。これが定式幕

楽屋の着到盤、いわゆるタイムカード

文楽人形でいちばんたいせつな、かしらのお部屋

無台下駄。底にはワラジがつけてある

# 10代とともに

—外国に文楽を紹介することについてお聞かせください。

## 「ことばを抜きにしても楽しんでもらえる文楽」

日本文化をもっと知ってもらおうという思いでやっています。歌舞伎などに比べれば文楽はまだ海外での知名度も低いです。それでも文楽の刺激をうけて海外でも3人遣いの人形劇が増えています。アメリカで生まれたミュージカルの「ライオンキング」などにも影響をあたえていますね。

文楽の語りである義太夫節は江戸時代の物語で、さらに節がついているので聞きとりにくいという「ことば」の問題があります。私がはじめて文楽を観た当時は、子どもでしたしなにも考えずに観ていたと思うんですね。しかしそのような状態のなかでも伝わってくるものがあった。海外の公演でもそれは同じで、ここが伝わってほしいなと思う場面で、ワッと拍手が来たりするのです。三味線も人形遣いも、物語のなかの愛情とか悲しさといったものを伝えようと表現をしているわけですから、そこがしっかり伝えられていれば、「ことば」を抜きにしても楽しんでもらえるんじゃないかなと思います。

それから私自身、旅行が好きですから海外には行きたい(笑)。これまでに、欧米はたくさんまわったし、南米や中国、ロシアなどでも公演しました。アフリカや東南アジアには行っていないので、今後行ってみたい場所です。

—10代にむけてのメッセージを。

## 「自分が好きなものをみつけて」

いまの若い人们は「結果」を早くに求め過

ぎているのではないか、という気がしています。私が文楽で学んだことからいえるのは、あきらめないこと、辛抱することのたいせつさです。自分自身、文楽という好きな道に入ってきたのですが、少し前の私も「いつ辞めようか」と悩んでいました。それはけっして文楽がきらいになったというのではなくて、「はたして自分がここにいていいのだろうか」と迷いながら続けてきた部分があったからです。人によって悩みはさまざまだと思います。たとえば「自分はここでこれだけやってきたのに結果が出ない」と悩んで、辞めてしまったりする。でも、そこで辞めてしまったらつまらないことになるんじゃないかな、と思うんです。文楽はどんなに才能があったとしても10年、20年と続けなければ成果が出ない世界。若いときに才能があっても辞めてしまった人はたくさんいます。そういう状況をみていると、そこであきらめないで、もうちょっと粘ってみてほしいと感じます。その後で見えてくるもの、わかってくることがあるんですね。それは文楽に限らず、みんなが社会に出ても同じだと思います。

そしてぜひ、自分が好きなものをみつけてもらいたい。私が好きなことを仕事にできたのはとても幸せなことでした。私のように仕事のなかで悩んでも、好きだから何とかやってこられたということもあるし、たとえそれが仕事でなくとも、好きなことをもっている人は定年後になんでも輝いてみえるんですね。いろいろ悩みもありましたが、この歳になってみて、「文楽に会えてよかった」とあらためて感じます。いま自分が興味があること、いろんなことに挑戦してみて、それを深めてみる。そうするなかで自分のなかになにか浮かびあがってくるものが、きっとあるはずです。

(文責 編集部)

●豊松さんが12歳で文楽の世界に飛び込んでいったと聞き、すごいなあと思いました。好きなことを仕事にできるのはとてもステキなことだと思うので、ぼくもそんな人になりたいです。

吉田祐之介(小5／大阪市・吉田P)

●最初は、文楽についてあまり知らなかったけれど、実際に楽屋の裏などを見せてもらって、とても興味をもつことができました。

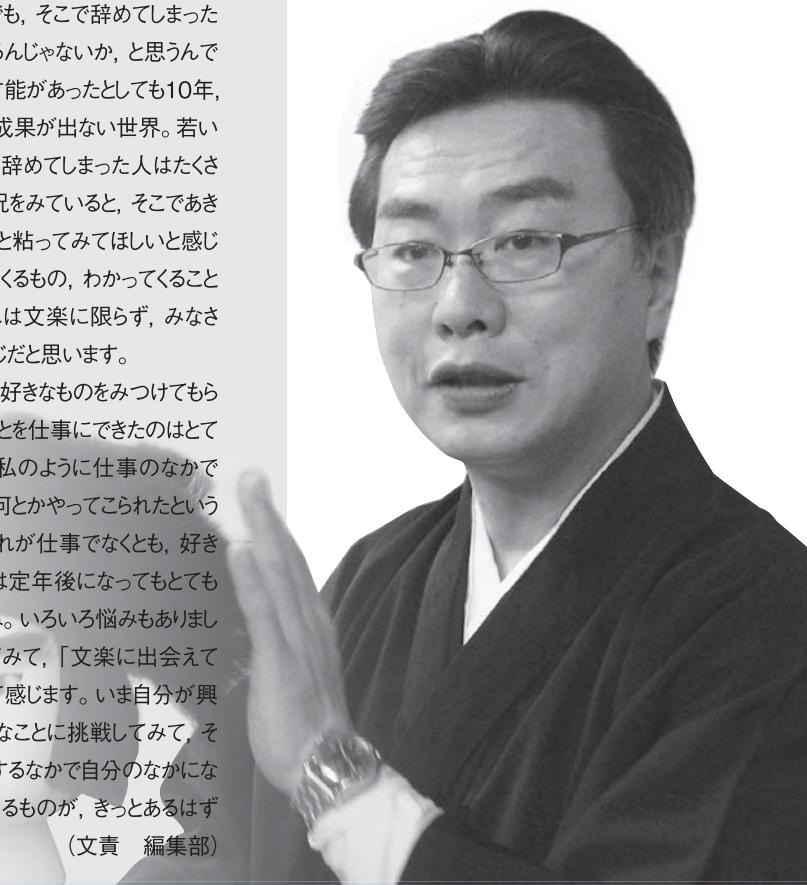
藪内拓紀(小6／茨木市・藪内P)

●文楽について深く学ぶことができ、もっと知りたいと思うようになりました。人形を持ってみたときには、こんなに重い人形を生きているかのように動かせる人形遣いの方を尊敬しました。

北原 舞(中2／吹田市・北原P)

●インタビュー当日に舞台を見たのですがとてもおもしろく、人形を動かす方がたはスゴいと感じました。豊松さんが舞台裏の説明してくれ、さまざまな仕掛けが用意されていることを知り驚きました。

飯尾和樹(高1／加古川市・三宅P)



## インタビューを終えて

[取材協力] 大阪市近郊のラボ会員のみなさん



# 外國からの仲間に

## Australia

### 受入れをして、 ひとつの目標ができた

由谷 萌 (大1／和泉市・辻本パーティ)

この冬、私にはもうひとりの妹ができました。ソフィ(彼女の愛称)はオーストラリアに住む、とてもかわいくてやさしい17歳の女の子です。ソフィにはじめて会ったとき、なかなか会話をできなくて、ほんの少し不安なスタートでしたが2日めぐらいになると、たくさん会話ができるようになりました。共通の話題をさがそうと、夕食のときに積極的に友だちの話だと、「あのsinger知ってる?」といった日常的なことから聞いてみたり。結果はとても盛りあがりました。盛りあがる内容はどの国の人も変わらないのですね!

思い出と聞かれると、ありすぎて書ききれません。結婚式に行ったり、フットサル、クリスマス会、振袖展示会に、祖母の家でのお餅つき!初詣にいったり、友だちと遊んだり、京都や奈良、ショッピングにも行きました。

日本語が話せないソフィとのコミュニケーションは、はじめのころは英語だけで行なっていました。自分の知っているかぎりの英語での表現と、辞書やジェスチャーをつかって会話をしていました。ソフィもいつしうけんめい理解しようと聞いてくれたので、伝えたいことは、だいたい伝えることができるようになりました。オーストラリアと日本について話したり、教えあつたりしているうちに、だいたいに日常的な会話はあまり困らなくなっていました。だから、ソフィとはコミュニケーション



左: Sophia Little 右: 由谷 萌

ケイションでとくに困っていたわけではなく、自分らしいやり方で十分だったと思っていますが、友だちとソフィが話しているのを見て、自分がもっと英語を話すことができたら、ソフィともっといろんな話ができるのに…と少しやしい思いがこみあげてきました。だから、次回ソフィに会うときまでもっと英語を勉強しようと心に決めました。私にひとつ目標ができたきっかけです。

まずは、もっと英語でいろんな表現ができるように、使える単語を増やしてソフィと手紙やメールでたくさんやり取りすること。そして、英語をツールとして、人とコミュニケーションをたくさんとていきたいです。英語は世界共通語なので、英語がつかえることによって世界中の人がいろんな話ができると思うと、いまからわくわくしています。

最後に、この受入れをするにあたって、自分自身と家族のスケジュールのやりくりがとても大変でした。でもソフィのおかげで家族全員そろっての時間も自然と増え、ほんとうによかったです。楽しさと感謝でいっぱいの2週間。協力してくれた友だちや人、そしてソフィ、すてきな時間をありがとうございました。ソフィからもらった最後の手紙に、「めぐは日本のおねえさん」と、いちばんの友だちと日本語で書いてありました。私も同じことを思います。

### 来日者の感想

#### ホームステイ中に見た景色、忘れません Sophia Little (17歳／オーストラリア)

今回私は、たくさんのラボの集まりに行く機会に恵まれました。キャンプにいっしょに行く友だちや、ホームステイを経験した友だちに会えて、とても楽しかったです。学校に行く前は、ちょっと怖かったけど、たくさんのすてきな人たちに会えて、よい経験になりました。私は3年間日本語を勉強しましたが、うまく話すことはできません。でも英語の授業を手伝ったり、おせち料理の作り方を学んだりして、私の日本語を

上達させることができました。ホストファミリーは、私にいろいろな種類の食べ物にトライさせ、たくさんのイベントにも連れていってくれました。そのたびに説明をていねいにしてくれました。お餅つきや、着物も着せてもらいました。京都のお寺に初詣、にぎやかな大阪の街にも行きました。どの経験も楽しいものでした。ここで出会ったたくさんの友だちのこと、ホームステイ中に見たここでの景色をけっして忘れません。

## China

### この交流をとおして できた夢

飯野幹大 (中2／足利市・石川パーティ)

「はじめまして、程嘉豪です。どうぞよろしくお願いします」といつて、差し出した手をぼくは握り返した。こうして、程くんとぼくが「兄弟」となる2週間がはじまった。

程くんは、好奇心旺盛で何でもチャレンジする男の子だった。食事は、「なんでも食べます」といつてほんとうに母の作ったものを全部食べていた。にがてだなと思うものも、とりあえず全部食べてから「ちょっとにがてです」といつた。初日の会話でにんじんはにがてだといっていたのに、食卓にならぶと全部食べていた。ぼくは昨年の夏にペンシルバニア州で1か月を過ごしたが、にがてなものをすべて食べることはできなかつたし、ホストに“What do you want to do?”と聞かれたときに“I want~”と自分のやりたいことをいえなかつた。だからホームステイに行く前に程くんに会つていれば、ぼくのホームステイもかなり変わつていただろうな、と思つたりました。

家族でテーマパークに行ったとき、ちよんまげをつけた男の人や着物や刀に興味津々の程くん。マスコットキャラクターには磁石のようにくつづいてはなれなかつた。羽子板やこまなどの昔の遊びにも挑戦し、

### 来日者の感想

#### ほんとうにきれいな国、日本

ぼくがホームステイしたのは飯野くんの家族です。お母さんはとてもやさしい人でした。なんでも手伝ってくれ、毎日洗濯してくれました。料理もとてもじょうずでお母さんがつくった料理が大好きでした。お父さんはいつもおもしろい話や動きをして笑わせてくれました。毎晩お茶を飲んでサッカーの話をしたり、試合を観たり、とても楽しかつたです。飯野くんは足が不自由でした。でもなんでもひとりでできます。ぼくたちとだいたい

# 学んだ冬



左：程嘉豪 右：飯野幹大

むずかしくても楽しそうに遊んでいた。

日本語もすごく勉強していて、会話が途切れることはほとんどなく、わからないこととばができて、電子辞書を開くのも1日1回くらい。1日に何度も会話するのに1日に1回しか電子辞書を開かないのだから、程くんの日本語能力の高さがよくわかると思う。

ぼくは、そんな外国語力の高い程くんと2週間を過ごして、ひとつ夢ができた。それは、語学関係の仕事に就きたいという夢だ。外国語でもまったく問題なく理解し会話している程くんを格好いいと思うようになり、通訳か翻訳の仕事に興味がでてきたのである。

こんなによい影響を与えてくれた程くんとお別れするときがきた。泣かなかつた悲しいとも思わなかった。それは程くんをほんとうの兄弟であり家族だと思ったから。ホームステイに行くために日本の家族と別れるとき、泣く人はほとんどいない。また1か月後に会えるとわかっているから。

ぼくは北米交流でペンシルバニアに行ってMusser familyと別れるときも泣かなかつた。程くんも家族だからまた会える。だから泣く必要なんてない。

程嘉豪 (15歳／中国)

同じです。ぼくはとても感心しました。たぶん長い時間練習して、いろんなことができるようになつたのだと思います。彼とはいつもいろいろな話をしました。長野でのキャンプはとても楽しかったです。ぼくは上海から來たので、そんなにたくさん雪は見られません。雪像を作ったり、トンネルを作ったり、そりも体験しました。時間ははやいですね。もしもチャンスがあれば、またきっと日本にホームステイをしにきたいです。

昨年の12月から1月にかけて、オーストラリア9名、中国5名の青少年が来日しました。交流を終えて、日本のホストファミリーと来日者は、さまざまな経験を通じ、たくさんの思い出ができたようです。受入れをしたホストファミリーのリポートと、来日者の感想をお届けします。

## Australia

### 何度も日本語で伝えて返ってきた日本語!

薮 千晶 (高2／西宮市・薮パーティ)

冬休みの3週間、私はMareeを受入れました。受入れが決まったのは来日の2週間前で、心の準備やメールのやりとりもできませんでした。毎日どこかに連れて行ってあげないと、満足のいくホームステイにならないのではないかと考えていた私は、予定が立てらなかつたことについて申し訳なく思っていることを伝えました。Mareeは「日本に来て生活できるだけで十分満足だから、特別なことはしなくてもいい」といってくれました。そのことを聞いて、自分自身が中2のときに体験したアメリカでのホームステイをふり返り、どこかに出かけなくても、ただ家族の一員として生活ができるだけ、満足だったことを思い出しました。そして私自身、Mareeのことを家族の一員として迎え入れることができました。

Mareeは日本の料理や文化などあらゆることに興味をもって、積極的に取りこんでいました。はじめて目にする料理も見た目で判断せず、まずは食べて確かめ、また折り紙や和菓子作りにもトライしていました。私なら最初から無理だと諦めてしまうようなことでも、Mareeはあたりまえのようにこなしてしまうので、すごいと思いました。彼女から「異文化を知る」ということは、見た目や人の意見で判断するのではなく、まずトライして自分自身で確かめてみることがたいせつだということを学びました。

#### 来日者の 感想

#### 日本で経験した冒険を話したい!

日本へは来たことがあります。そのときは観光地とショッピングが中心でしたが、今回のホームステイは日常生活や近代文化など、日本をより深く知るための絶好のチャンスとなりました。クリスマスの頃はホームシックになりましたが、ホストファミリーが私を助けてくれて、すてきなクリスマスをすごせました。ホストファミリーは私をたいへん歓迎してくれました。いっしょに折



左：Maree Dawson 右から2番め：薮 千晶

Mareeは日本語をほとんど理解できるようになっていましたが、自分から日本語で話すことはありませんでした。Mareeに少しでも日本語で話してほしいと思い、ゆっくりと話しかけていましたが、なかなか日本語で返事が返ってきません。私がホームステイをしたときは、自分が知っている単語を並べ、ジェスチャーを使って相手に伝えていました。思っていることがうまく伝わらず苦労したこともありましたが、ホストは時間がかかるかも、私が話し終わるまで待っていてくれました。そんなやりとりのなかで、相手に伝わったときの喜びはとても大きく、その後の自信にもつながりました。だからMareeにも日本語で伝えるむずかしさ、そしてそれを乗り越えたあの喜びを知ってもらいたくて、何度も日本語で話しかけました。はじめは英語でしか返ってこなかつた返事も、いっしょにいる時間が増えるにつれて日本語で返してくれる機会が多くなり、私や友だちは日本語で会話できるようになりました。Mareeに日本語で質問や会話をしていいのか、それとも英語ばかりで話すべきなのかとなやんでいたので、日本語で返してもらったときはMareeが日本語にチャレンジしてくれたことにたいして、とても喜びを感じました。別れる日が近づくにつれて、Mareeがほんとうの妹のような存在になりました。

Maree Dawson (16歳／オーストラリア)

り紙をしたり、和菓子を作ったり「お鍋」を食べたりと、とても楽しい時間を過ごしました。きれいな和菓子の詰め合わせはおいしかった。美しい龍安寺も見せてもらいました。ホストファミリーと見た六甲山からの夜景も忘れられません。

あつという間の3週間。オーストラリアの家族や友人に、私が経験したすべての冒険を話したくてワクワクしています。

いま現在たずさわっている仕事は、声優、俳優、ナレーター、ラジオDJ、音楽業など、「将来なりたいな」と思ってた業種から、「まさか自分が?」と思っていなかった業種までさまざまです。最近では、いっしょに番組を制作するスタッフに「子どもの頃見てました」といってもらえるくらい、気づけばそれなりの年月、この仕事を続けています。それもこれもすべては出会いのおかげ。そしてその出会いの始まりはもちろん、ラボからなんです。

## 将来の夢は、音楽と役者

小学校2年生のころ、ラボと出会い、4年生ごろに地域活動で出会ったラボの先輩たちと、18歳のときに劇団を立ちあげ、同時に芸能プロダクションと出会って、芸能業をスタートしました。数年後に声優業にお誘いを受け、その後もさまざまな出会いをくり返し、いまにいたります。

役者で食っていきたい—そう強く思ったのは、高校2年生のころ。卒業後の進路を考えているなか、ぼくには将来の夢がふたつありました。ひとつは音楽、もうひとつは役者—正確には演出家でしたが。音楽は中学生からバンドを組みライブ活動をしていたこともあり、描いていた夢でしたが、「好きなことだから、逆に仕事にしたくないな」と考えていました。仕事にしちゃうと、いやなことでもやらなきゃならない気がして。それに、まわりにはもっとうまい人たちがいたので自信もなかった。だからどんな形であれ、自分のペースで好きなように、一生続けていくものにし



**森久保 祥太郎**  
声優・俳優・歌手

人気声優であり、ラジオや舞台など多方面で活躍中の森久保祥太郎さん。数かずの有名アニメで、個性豊かなキャラクターを演じている森久保さんが、いつもたいせつにしているのは「出会い」。そう考える原点はラボの活動から始まっているそうです。

ようと決めました。役者は、映画「コーラスライン」に登場するマイケル・ダグラスが、指をパチンパチンと鳴らしながら人びとに指示をだし、舞台をつくっていくようすを見て(実際にはオーディションのシーン)「ああいう仕事がしたい」と思ったのです。それがじつは「演出家」という仕事だと知り、「舞台の演出家」という夢をもちました。そのときは演出家がなんたるかも、"芝居のしの字"も知りませんでした。

ラボの先輩たちと劇団を立ちあげるときに、「演出がしたい!」と名のりでたのですが、先輩たちには、「演出するならまず役者を経験したほうがいい」といわれ、役者として参加することになりました。いま思えばあたりまえです。芝居もなにも経験がない奴に、演出なんかまかせられるわけがないですから。

ぼくの進路決定に大きく影響したのはラボの存在でした。よくいえば、好奇心旺盛。いい換えれば、飽きっぽい。そんな性格の自分が唯一、ずっと飽きずに続けてこられたのがラボであり、テーマ活動でおこなった舞台をつくるという作業でした。夢は役者に定まったものの、同時に大学進学もしっかり考えていました。プロの役者になるなんて、そう簡単じゃないと思っていたから。役者になれなかつたら映像制作の職につきたいと思い、映像制作が学べる多摩美術大学に入学しました。進学の目的はもうひとつ「人脉づくり」です。多くの「人」と「モノゴト」との出会いを求めて大学にいきました。

## 大きな転機となった国際交流

出会いというのは、だれにでも同じようにおとずれるチャンスです。そのときたいせつなのは、「出会いをどううまく自分の人生に取りこめるか」だと思います。幼少の頃、前にでるタイプではなかった自分がそのまま育っていたら、出会いをうまく取りこめるようにならなくなかったと思います。

そんな自分にとって大きな転機となったのがラボの国際交流でした。正直、アルファベットの大文字と小文字の区別もできなかった中学2年生の夏休み、アメリカ・カンザス州にホームステイをしました。見るもの、ふれるものすべてが新鮮で、すべてが新しい刺

激となって自分に吸収されていく実感、その感覚をいまでもなつかしくおぼえています。

アメリカといえば「地平線が見える」ことを思いかべますが、カンザスは丘陵地帯が多く、なかなか地平線には出会えませんでした(笑)。でも、そのならかな丘陵を、大きな雲の影が流れていくようすや、州の花でもあるひまわりが、黄色い群れをなしてあちこちに咲いていた景色—アメリカを感じた空気と光景はいまも忘れていません。

心残りだったのは、やはり語学力。最初は辞書を片手に過ごしていましたが、日にちがたつとなんとかなるもので、いつしか辞書を手放し、刺激的な日々を送っていました。でもここいちばんの自分の意思を伝えたいとき、そのことばがわからない。知っている単語を駆使して、遠回りな会話をしながらなんとか自分の意思を伝えていました。

結果としてその経験がいまでも生きています。人に自分の思いや考えが伝わらないからとあきらめずに、自分に詰まっているありつたけの単語を組みあわせて意思を伝えることをしています。たとえば仕事で舞台やライブの構成を考え、スタッフに伝える、新しいプロジェクトを企画しプレゼンテーションする機会が多々あります。また、ラジオ番組でのトークなども同じです。「どう会話を組み立てれば、相手に効率よく伝わるか?」日々の仕事に大きく関わるこのセンスは、あのホームステイで経験した遠回りな会話から得られたものではないかな、と思います。同時に出会いをうまく取りこむセンス、これもこのことがきっかけとなった気がします。

## 自分自身を客観的にみる

ホームステイ中に、「いまの自分の状況、どういうプロセスで、なにをどうしたいのか」「それが相手にどう伝わり、どう理解され、どう反映してくれるのか」というようなことを、必死に考えていたんでしょう。伝える方法はひとつではない。あととあらゆる角度から自己分析をし、あととあらゆるアイディアを浮かべる。つまりは、自分の置かれている状況を一步はなれて見ることにより、自分を知ることができる。自分を知ることでほんとうにたいせつなモノ、理想…などなど、そういうた

# チャンスを取りこんで、体験を育てる。

モノが鋭く浮き彫りになってきます。すると、出会いやチャンスがあったときに、瞬時に「この出会いやチャンスが自分にどう影響するのか」「重要な出会いだと判断したときに、どう行動すればよいのか」という考え方めぐり、即行動に移せるのです。これも国際交流で得た大きなことのひとつでした。

心残りだった語学力は、帰国してから思わぬ衝撃となりました。英語にたいして、抵抗がなくなり、もっともっと話せるようになりたいと思うようになり、学校での勉強が楽しくなりました。英語が好きになって外国の方と話すのも怖くなくなりました。高校の受験対策も、英語だけはズバ抜けてよかったため、英語を武器に乗りこえました。

## 外国人とのコミュニケーションに抵抗はない

高校の途中からは、音楽活動や芝居にのめり込んでいたため、英語とふれる時間が極端に少なくなっていました。みなさんは「もったいない」と思われるかもしれませんね。確かにもったいない部分もありますが、ほかに得られたことがたくさんあるので、自分ではよしとしてます(笑)。

語学力は低下したとしても、同時に得たコミュニケーション力は、いまだに生き続けています。だからいまでも、外国の方とコミュニケーションをとることには、なにも抵抗はありません。ラジオのパーソナリティをやってみると、毎回ゲストをお迎えして話をすると、初対面の方ともスムーズにうちとけなければ

ば、という場面でもそのコミュニケーション力は発揮されています。

## 成果がでるタイミングは人それぞれ

同じような話で、「ホームステイの経験があるの? ジャ、英語話せるんだ?」と聞かれたり、「せっかくホームステイ経験したのに、自分はなにが変わったんだろう?」と悩んだりと、ホームステイの成果についてはあれこれあると思います。でも成果は人それぞれだし、成果がでるタイミングも人それぞれ。もっといえば、国際交流とは、「行ってきたからなにがどうなった」とひとことでいえるような浅いものではなく、もしかしたら何十年か後に突然その経験が生きてくるといった深いできごとだと思うんです。もちろん、帰国してすぐにその実感を語れるのもすばらしいです。でもたいせつなのはまず、「体験した」という事実であり、その体験をこれから自分がどう育っていくか、ということだと思います。

## 経験をぶつける

冒頭にあげた「え?まさか自分が?」の職業とは、じつはいま自分がいちばんの生業としている「声優業」です。縁あってお誘いを受けた声優という職業。はじめはいやいやで仕方ありませんでした。養成所の経験もない自分は、舞台などの芝居と違って、画にあわせて芝居をすることがむずかしかったし、思うようにはいかないし、何回やってもへたで、ほんとうにつらかったんです。でも、

本番はかならずやってくる。追い詰められて、じゃあどうする?このくり返しのなか、ある日決意しました。「舞台での芝居しか経験がない。だったらその経験だけをとにかくぶつけてみよう」と。通常は衣服や台本などのノイズ(雑音)をださないように、マイクの前でじっと静止してセリフを録音するのですが、そのときの自分はマイクの前で、まるで舞台で演じるかのように手足をバタバタ、全身を使って表現しました。当然、ノイズが出来まくりのNGテイクを何回も重ねた結果となりましたが、自分のなかでなにかが変わっていく実感がありました。舞台という場で体験したこと、ほかの場で育てはじめた瞬間でした。ちょっとニュアンスは違いますが、みなさんは国際交流においても、ふだんの活動においても、その「体験」をぜひ育ててほしいですね。

ふだん、なかなか体験できない機会というのは、ほんとうにかぎられたチャンス。その出会いとチャンスをうまく取りこんで、「体験」を育てる。国際交流には、そういった魅力がたくさん詰まっていると思います。

100人が国際交流をすれば、100通りの国際交流がある。これから国際交流に参加するみなさんは、それぞれの空気を吸って、世界に大きく羽ばたいてほしいですね。

ぼくもし今度ホームステイをするチャンスを得たら…今度はしっかり、語学力の体験を育てたいなあと思います(笑)。

森久保 祥太郎・出演作 ※コメントは森久保さん

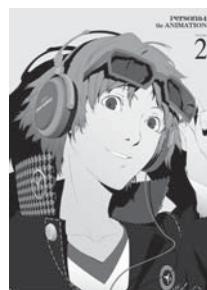
### メジャー [茂野吾郎役]



「メジャー 吾郎・寿也激闘編」コレクターズボックス  
発売中  
◎溝田祐也・小学館／NHK・NEP・ShoPro  
発売元：小学館／エイベックスエンタテインメント  
販売元：エイベックスマーケティング

茂野吾郎という男を知れば知るほど、自分とのシンクロ率が高まっていました。性格がとても似ています(笑)。親子で楽しんでもらえる作品だったので、多くの反響をいただきました。子どもたちが夢中になって熱くなってくれる作品に出会えて、声優みようにつきます。たとえ遠回りでも、信じた道を進むべし! という教訓を教わった作品です。

### ペルソナ4 [花村陽介役]



「ペルソナ4」1~4 発売中  
©Index Corporation /  
「ペルソナ4」アニメーション製作委員会  
発売元：アニメックス  
販売元：ソニーミュージックディストリビューション

人気ゲームのアニメ化作品。演じている花村陽介は、よくしゃべるムードメーカー。あ、こういう奴いるなっていう、等身大の高校生。彼らの暮らす街が、自分の育った八王子とよく似ていて、とても共感できました。ああ、青春っていいなあ、仲間っていいなあと感じられる作品です。ちなみに共演者からは、そっくりだといわれます、ノリや性格が(笑)。

### 【主な出演作アニメ】

- メジャー(主人公 茂野吾郎役)
- ペルソナ4(花村陽介役)
- NARUTO疾風伝(奈良シカマル役)
- テニスの王子様(切原赤也役)
- カードファイト! ヴァンガード(三和ダイシ役)
- 男子高校生の日常(たかひろ役)
- 忍たま乱太郎(難波晃奈門役)
- バクマン。(KOOGY役)
- ジェネレーター・レックス(主人公 レックス役)
- サムライガン(主人公 市松役)
- ヤマトナデシコ七変化(高野恭平役)
- Get Backers(天野銀次役)
- 魔術士オーフェン(主人公 オーフェン役)
- 爆走兄弟レッツ＆ゴー(ミニ四ファイター役)
- 真・女神転生デビルチルドレン(主人公 甲斐剣那役) 他

森久さんの活動状況はホームページやブログで配信しています。

[HP] <http://www.vims.co.jp/morikubo/>  
[ブログ] [http://blog.goo.ne.jp/show-time\\_2007](http://blog.goo.ne.jp/show-time_2007)

## Looking towards the future

Let's Homestay / Director  
Stuart Cundy

レッズホームステイ 代表  
スチュアート・カンディ



Last year we proudly celebrated the 10th consecutive year that the Labo International Exchange Foundation has sent a group of Labo students to Tauranga, New Zealand. Given the adversities over the last 10 years which included SARS in 2004, N1H1 Flu of 2009 and the Great East Japan Earthquake earlier last year, Labo continued to visit us and achieve the 10 year milestone.

We have had 610 Labo students stay with over 400 families in Tauranga over the past 10 years, some of whom have hosted a Labo student as many as 6 times. The inaugural IN-NZ Labo program involved 2 schools, Tauranga Intermediate School and Tauranga Girls College. In the 2nd year Tauranga Boys College was introduced which made up the three core schools that have hosted the program each year. In some years when numbers were up, two schools in the Otumoetai area of Tauranga were brought in to help host, Otumoetai Intermediate and Otumoetai College. However it was fittingly ironic that the Labo numbers for the 10th anniversary year were enough for just the three core Tauranga Schools to host and help celebrate the achievement.

I for one am very honoured to have this association with Labo. After meeting Labo staff in 2001 and then visiting the Head office in Tokyo the following year I started to gain an understanding in respect to the concept of the aims and goals of Labo. During a short stay with my own family in Nishinomiya City, Hyogo-ken in 2006, I was able to send my own children to a Labo activity. They enjoyed the mix of English and Japanese of the Labo themes and playing with the other kids. I would often find myself talking with the other mums outside while we waited for the activity to end... it was a great opportunity for me to see a Labo activity in action thus furthering my understanding of the Labo culture.

For me it seems to be the environment created by the Labo concept that draws a particular type of child and family to the organisation. Here in New Zealand many host families and the schools alike keep the schedules open so they may host the Labo group each year. This is a credit to Labo organisation and to the calibre of child that visits us from Labo each year.

Where to from here? I would like to see the New Zealand program grow in popularity amongst the Labo members. I would like to create more awareness in New Zealand for the Labo In-Japan program and to be able to provide our past In-Japan participants with more intern opportunities. Thank you Labo for 10 enjoyable years and I look forward to the next.

ラボとニュージーランドとの青少年交流が10周年を迎えたことをたいへんうれしく思います。この10年間、さまざまな苦難もありましたが、交流が継続され、めでたく昨年、交流10周年を迎えることができました。

この10年間で、約400家庭以上のホストファミリーが、610名のラボ会員を受入れました。そのなかには、6回受入れをした家庭もあります。交流の初年度は、タウランガ・インターミディエットスクールとタウランガ・ガールズカレッジがラボを受入れました。その後タウランガ・ボーイズカレッジも加わり、現在は毎年3校がおもにラボ会員を受入れています。昨年はおもな3校が受け入れ、学校関係者を招き、10周年の記念式典を行ないました。

私はラボ国際交流の交流団体として関わっていることを光栄に思っています。2001年にラボの責任者がタウランガを訪問し、翌年に私が財団事務所を訪ね、相互に青少年国際交流の教育的意義を

理解することができました。2006年には、西宮市のラボに私たちの子どもたちを通わせました。日本語と英語で行なわれるラボ活動を楽しむ姿を目にするとはたいへんうれしく、私自身、迎えにこられたお母さん方と話をして、一層ラボを理解することができました。

ラボ活動は子どもたちやその家族にとって、細かなところまで配慮されたすばらしい団体であると思います。そのような理由からニュージーランドのホストファミリーや学校側は、毎年喜んでラボを受入れるのであります。これはラボに対する信頼の証であり、また交流に参加したラボ会員の功績も大きいでしょう。

青少年の未来を考え、ぜひニュージーランドへ大勢のラボ会員を送り出してください。私たちは、ひとりでも多くのニュージーランド青少年を、日本へ派遣し、相互理解を促進したいと考えています。

2012年がすばらしい交流の年となることを願っています。

Vol.5

# ラボ・インターンからの手紙



## A Taste of Japan Obento: Japan in a Box Lunch, Anyone?

When I was first considering what aspect of Japanese culture to explore through my cultural project, I thought of three possible topics: *kimono*, Japanese fashion, and *obento*. While much research has been conducted on all of these topics, I finally decided to learn as much as I could about *obento*. As I discovered the importance of food culture in Japan, it seemed that *obento* could lead to opportunities to learn more about other aspects of Japanese culture and daily life.

I first needed to find out exactly what “*obento*” was. Also known as a Japanese lunch box, *obento* is basically a single-portioned meal that requires neither refrigeration nor heating, and can be easily carried by hand. Traditionally, the *goshiki* colours found in classical Chinese philosophy, blue, yellow, red, white, and black should be found in the *obento* food contents. While there are some exceptions, this definition of *obento* covers a wide range of examples from the nation’s most culturally and historically significant periods, making the common lunch box an immensely underrated and overlooked icon of Japan.

Through online books and articles, I discovered that *obento* has a long history within Japan. In general, most modern scholars agree that the practice of *obento* first was seen in Japanese culture during the 12th century. However, examples of *obento* use such as in the Japanese custom of *hanami* have been found in many Japanese historical records.

Exploring the long history of *obento* helped me to answer a question I have been wondering since I first arrived in Japan: why is there always plastic grass in *obento*? I found that leaves were originally used to divide or wrap certain foods and help keep them fresh. By looking at the leaves, people could see how fresh the food



Ayeeshaさんが実際につくったキャラ弁。

オーストラリア第17期ラボ・インターン  
Ayeesha Abbasi  
アイーシャ・アバシー



ラボ・インターンとして1年間活動したAyeesha Abbasiさん（19歳／オーストラリア・キャンベラ出身）は1月に帰国しました。Ayeeshaさんは日本文化研修において、日本の食文化に注目し、「お弁当」をテーマとしました。

was. The freshest foods had the greenest leaves. These leaves were also used to keep the different flavors from mixing together and are still used like this today.

After I had learnt the basic information about *obento*, I wanted to try making different *obento* myself and see what kinds of *obento* people make nowadays. Labo volunteer leaders organised *obento*-themed Labo gatherings while my host mothers would include me in their *obento* preparations and allow me to try making *obento*, too. These experiences helped me to really understand the importance of *obento* in Japanese families.

My host mothers have also shown me that an *obento* is meant to be healthy, tasty, and enjoyable. “Kyaraben” or character *obento*, is an easy way to introduce new foods to their children. By using food to make fun characters, children will begin to eat foods that they might normally be scared to try. In this way, *obento* helps to make sure that children eat a healthy, balanced lunch while introducing new foods.

Mothers in Japan work hard to prepare meals that are not only healthy and tasty, but also show their love. I found that *obento* are used as a way for mothers to connect with their children. When I saw the *obento* my host mother had prepared for an *undokai*, school sports day, I could see that the *obento* itself was another way for the mother to show her love and support during the big event. This type of *obento* preparation usually continues until the end of primary school.

Through this project, I have developed a deeper understanding of *obento* and its role in Japanese society. For this, I wish to thank the Labo mothers and volunteer leaders who not only organised *obento* parties for me, but also let me loose in their kitchens, too. I know I will continue to have an interest in making *obento* in the future. I am lucky to have had this experience and plan on introducing this wonderful piece of Japanese culture to my family and friends when I return to Australia.

## THIS YEAR'S INCOMING INTERNS ご紹介します！ オーストラリア 第18期ラボ・インターン



**Elizabeth Treglown**

エリザベス・トレグロウン

出身：ニューサウスウェールズ州

年齢：19歳

2007年来日、2008年ラボ会員受入れ

趣味：絵画、写真、ネイル・アート、旅行

配属支部：中国、四国

(3月から6か月間配属予定)



**Toby Schneider**

トビー・シュナイダー

出身：ニューサウスウェールズ州

年齢：18歳

2010年ラボ会員受入れ、2010年来日

趣味：料理、ダンス、ダンスの振付

配属支部：東京、千葉

(3月から6か月間配属予定)

## 国際友好親善事業

### ■海外訪問プログラム

中国(北京市月壇中学,上海外国语大学付属外国语学校との交流)  
40名参加  
日程:3月23日金～31日土

### ■第25期高校留学生準備合宿

日程:4月28日土～30日日  
会場:国立オリンピック記念  
青少年総合センター(渋谷区)

### ■海外訪問プログラム引率者会議

日程:5月19日土,20日日  
会場:成田ビューホテル(成田市)

### ■北米からの青少年日本語研修生 受け入れプログラム

日程:6月15日金～7月13日金  
30名来日(予定)

## 東京言語研究所

[ADDRESS](http://www.tokyo-gengo.gr.jp/) www.tokyo-gengo.gr.jp/

### ■春期特別講座

現代言語学の主要な研究領域を2日間で広く学ぶことができます。  
日程: 4月14日土,15日日

10:00～17:00

講師: 西山佑司氏(明海大学／慶應義塾大学)  
ほか12名

### ■理論言語学講座スタート

言語学の広い領域について、今年度は入門から上級まで15課目を開講予定です。

日程: 5月14日月～12月14日金

1限目(18:00～19:30)

2限目(19:40～21:10)

通年(22回), 前期・後期(各11回)

### ■公開講座

日程: 6月9日土 14:00～17:00

講師: 小泉英明氏(日立製作所／脳科学)

## ラボ日本語教育研修所

[ADDRESS](http://www.labonihongo.com/) www.labonihongo.com/

### ■外国人のための日本語教育

2012年度日本語教育本科コース  
期間: 4月9日月～2013年3月22日金

### ■地域の多文化共生の推進

①日本語ボランティア入門講座(埼玉県川口市)

期間: 4月17日火～5月8日火, 全4回

今年度は、全4回の講座を年間3期、または4期開講する予定です。  
②多文化共生のための子ども国際交流ひろば

地域に住む外国籍の子どもと日本の子どもが、遊びや学びを通して交流する場を提供します。

### ■日本語教師養成講座

①2012年度ラボ日本語教師養成講座

2012年度は「日本語教師をめざしている方」「資格はあるが自信のない方」「日本語ボランティアとして地域に貢献したいと考えている方」など、広く日本語教育に興味をおもちの方を対象に、それぞれのニーズに合わせた短期間の講座を複数開講します。

②公開講座

日本語教師をめざそうとお考えの方を対象に、日本語教育を多面的に捉える公開講座を開講します。

# G4head! No.135

## ふれあいやつながりの楽しみ方

ニイハオ! ぼくはいま、中国の上海に住んでいます。はじめて上海に来た17年前の1995年当時の記憶では、高速道路もなく、高いビルもほとんどなくて、路上には自転車があふっていました。いまでは超高層ビルが林立し、路上の自転車は自動車にかわり、高速道路に加えて、地下鉄が世界一発達し、夜中もネオンがキラキラと輝く東京よりも遥かに大きな都会になっています。たまに日本に帰国する機会があると、「日本の夜はちょっと薄暗いなあ」と思ってしまうほどです。日本だって世界のほかの街と比べると、ずっとにぎやかで、明るいのに。

みなさんが暮らしている日本はずいぶんとおとの国になり、人間のおとの背丈がなかなか伸びないと同じように、成長や変化を実感することは少なくなっていると思います。一方、世界にはまだまだ成長している国がたくさんあって、そんな急成長している国ぐにの変化に牽引されて、世界全体もまた大きく変化しています。ぼくがラボ

を修了し、仕事を始めてから20年足らずの間にも、仕事の速度がどんどん上がり、世界の変化が加速していることを実感します。

1985年にラボの国際交流でオハイオ州にホームステイし、翌年には同じ家庭からホームステイを受入れました。あのときの楽しかった体験が忘れられなくて、もっと世界のいろいろな人たちとのつながりのある仕事をしたいなあ、と漠然と思っていました。世界各地に拠点をもっている総合商社といわれる会社に入社して、実際にいろいろな国・地域の人たちと仕事をする機会を得ました。1997年から2年間ベトナムのホーチミン、2008年から上海に来て仕事をしています。日本国内だって地域によってさまざまな違いがありますが、中国は広大な大地にさまざまな人たちが暮らしていて、ことばも風習も、気候も食習慣も違います。これらの違いは、仕事の進め方や考え方、常識、人の性格にも影響があり、苦労する面もありますが、この苦労がまたおもしろいし、や

りがいがあります。

最近の上海は、世界中で日本人がもっとたくさん住んでいる街です。ラボっ子の友だちにも上海に引越した人がいませんか? 日本からだけでなく、たくさんの国からいろいろな会社や人が上海にやってきて活動しています。世界の変化が加速して、国境を越えたつながりはますます緊密になっていることを、上海は象徴しているように思います。みなさんもラボを修了して仕事をはじめたら、たとえ日本に住んでいても、さまざまな人のびとといっしょに仕事をする機会は確実に増えていくでしょう。海外のさまざまな人びとのふれあいやつながりの楽しみ方を覚えておけば、仕事も人生も楽しめることは間違いません。ラボのさまざまな国際交流活動を通じて、そんな体験が子どものうちからできるのは、とにかく楽しいし、将来にも生きると思いますよ。

ふくしま・けいのすけ=総合商社勤務  
神奈川・中島P・OB

### 福島啓之輔

会社員

